Bestopia21 ベストピア
2019年3月号
第385号
bestopia.jp
パリ通信
第88号

パリ通信第８８号
パリ・炎上・ノートルダム寺院

古賀順子さんからの通信です

(88) ノートルダム大聖堂炎上

21日の復活祭を目前に控え、聖週間に入った4月15日(月) ノートルダム大聖堂が炎上した。夏時間に移行し、20時過ぎまで明るいパリの夕刻19時前のことだ。パリ市内の多くの場所からもくもくと立ち昇る煙の柱が見えた。
建立850周年を超えたノートルダム寺院は、修復すべき箇所が多かった。10年単位の大規模な修復工事が予定されていて、昨年から始まっていた尖塔と屋根の修復足場が火元と見られている。先週、尖塔を囲んでいる聖人像が修復のため取り外されたばかりだった。
出火後約1時間、1860年ユジェーヌ・ヴィオレ・ル・デュック(1814-1879)が建立した尖塔が焼け落ちた。天に向かって地上93mの高みに聳えていた緑色の尖塔だ。その尖塔を支えていた十字形

の屋根も聖堂の床に焼け落ちた。屋根は「ラ・フォレ(森)」と呼ばれる木組み構造で支えられている。幅13m、全長100m、1000m2に広がる十字形の木造構造で、樫材の柱で構成される。古いものは12世紀に遡り、樹齢300年、1000本の樫はまさに森に相当する。この「ラ・フォレ」が短時間で燃え上がり、800°Cの高熱で鉛の尖塔は溶け落ちてしまった。
セーヌ川の水を使って400名のパリ消防隊が夜を徹して消火活動を行った。22時過ぎ、近くから見ると聖堂はまだ燃えていた。一体いつ火が消えるのかと絶望的な思いで長くは見ていられなかった。燃え上がってしまった炎に一気に大量の水を放水すると、火は消えても聖堂を全壊させることになる。ゴシック建築の構造上、消火法を誤ると取り返しが付かない。消防隊は「ラ・フォレ」の全焼と引き換えに石の構造を救う消火方針を決める。
一夜が開けた16日。石の鐘塔、石の構造壁は残った。崩れ落ちないかどうか緊急の調査が始まる。周囲は警察の包囲が厳しく、関係者以外は近寄ることはできない。多くの人が心配そうに見守る曇り空の下、痛々しく姿を変えた聖堂が未だ立っているのが嬉しかった。
状況が少しずつ明らかになってきた。尖塔の修復をしていた職人たちが事情聴取を受けている。宝物殿から「茨の冠」「聖ルイ王の衣」「聖杯」がパリ市庁舎に救出されていた。大鐘エマニュエル、パイプオルガン、南北の入口を飾っている美しい薔薇窓は残っている。祭壇の十字架と聖母の昇天像は無傷である。聖堂の床に焼け落ちた「ラ・フォレ」の黒い塊が積み重なっている。聖堂を守るために燃え尽きた遺骸のようである。
1972年には同じくゴチック様式のナント大聖堂が火災に遭っている。修復中の職人が使うガスバーナーが原因だった。ランス大聖堂の木造屋根は空襲で焼け落ちた。シャルトル大聖堂の屋根も火災に遭っている。聖堂に使われた木造部を火災から守ることが、フランスのゴチック建築の大きな課題である事を知った。火災後、ランス大聖堂はコンクリートを使った屋根の修復が行われた。ノートルダム大聖堂の「ラ・フォレ」をどう修復するか。樫材で再建するか、鉄筋や新しい建材を使うのか、すでに議論が始まっている。木材の産地では、樹齢300-500年の樫の木をノートルダム大聖堂再建に献上したいという市長が紹介されていたが、生木は3-4年乾燥させる必要があり、そう簡単ではなさそうだ。
ノートルダム大聖堂は世界中の人の心に生きているから、必ず修復されるに違いない。修復の技術もあり、資金も集まり、時間はかかっても必ず再建されるはずだ。私自身にとっても、ノートルダム大聖堂は日常に存在している。毎日のように前を通ったり、鐘を聞いたりする。パリに戻り、ノートルダムを見るとほっとする。多くの人と一緒に訪れた思い出が詰まった場所だ。これから修復されるノートルダム大聖堂は、四季折々、様々な思いで祈りに行ったノートルダムと同じではあり得ない。あの美しい姿が突然消えた。大切なものも形あるものはいつか無くなるのであれば、今あるものをしっかり見ておきたいと思った。

炎上するノートルダム寺院の前で祈る人たち=AP